

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02745

研究課題名(和文) 現代日本語における連体節内部構造の構文的・意味的研究

研究課題名(英文) A Syntactic and Semantic Study of Internal Structures of Adnominal Clauses in Modern Japanese

研究代表者

光信 仁美 (Mitsunobu, Hitomi)

関西外国語大学・英語国際学部・准教授

研究者番号：70330222

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：現代日本語の動詞述語で作られる連体修飾句節において、動詞述語が動詞的な性質で用いられているか、形容詞的な性質で用いられているかという意味的な特徴は、連体動詞句に現れる主体が「ガ」で示されるか「ノ」で示されるかという構文的な特徴と関連している。また、次のことが示唆される。上の二つの性質は、連体動詞句の修飾成分が連体的な形で示されるか連用的な形で示されるかという問題、そして連体動詞句の動詞のボイス的な意味の問題とかが関わっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

連体動詞句の研究においては、連体動詞句と被修飾名詞のあいだの格関係の有無による寺村秀夫(1975-1978)の分類「内の関係」「外の関係」がひとつの準拠枠となっている。本研究は、連体動詞句の構文的な特徴を考察することによって、ここに、連体動詞句と被修飾名詞の意味的なかわりに着目した高橋太郎(1979)の分類「関係づけのかわり」「属性づけのかわり」を位置づけることを試みた。

研究成果の概要(英文)：In modern Japanese, adnominal verb phrases may be semantically verbal or adjectival. This study shows that this semantic property of adnominal verb phrases determines whether the marker 'ga' or 'no' is attached to the subject of those verb phrases. It then suggests that this semantic property of verb phrases is also related to the choice of adnominal or adjunct forms of the modifiers in the adnominal verb phrases as well as to the presence or absence of voice in such phrases.

研究分野：現代日本語文法論

キーワード：連体修飾 連体動詞句 ガ・ノ交替 内の関係 外の関係 関係づけのかわり 属性づけのかわり

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現代日本語における、連体節の研究は、次にあげる五つの観点から研究がなされてきた。

(1)連体節と被修飾名詞との意味的な関係をめぐる研究がある。被修飾名詞が連体節内の述語に対して、格関係でむすびつきうる関係が否かで二分する寺村(1975-1978)の分析、高橋(1979)の「動詞句から被修飾名詞へ」という観点からの分析などがある。

花子は一郎がつくった料理を食べた。(一郎が料理をつくった)「内の関係」
誰かが廊下を歩く音が聞こえる。「外の関係」

(2)連体節内の述語動詞のテンス・アスペクト・ボイスなどの対立の中和あるいは変容という観点である(高橋 2003)。連体節では自動詞/他動詞、能動/受動などの意味上の対立がなくなる。

壁に かかった/かけた 絵
壁に かけた/かけられた 絵

(3)連体節が被修飾名詞にとって必須であるか否か、という観点である。金水(1986)は、これらを「限定」「情報付加」として連体修飾成分の機能を区別している。

人のためにつくす心が大切だ。(金水 1986 : 606) 「限定」

すぐにかつとなる彼の性格は昔のまま変わらない。(金水 1986 : 606) 「情報付加」

また、新屋(1989)は、実質的な意味をもちながら、連体修飾を必須とし、文末で述語形成にあずかる名詞を「文末名詞」とよび、その類型を提示している。

太郎は、だれからも好かれる性格だった。(「性格」...属性)

次郎は、みんなが賛成するならやってもいい考えだ。(「考え」...主観)など

(4)連体節と主節との関係という観点からの研究である。この観点からの研究はまだ新しく、大島(2010)による研究があり、次のような、主節の中で接続節(連用節の一つ)に近い意味をもつ連体節について論じている。

いつもは強い酒を浴びるほど飲む人が、今日はビール一杯でひっくり返った。

あの人はいつもは強い酒を浴びるほど飲むのに、今日はビール一杯でひっくり返った。
(大島 2010)

(5)談話における連体節の機能という観点である。この観点からは、増田(2001)が、連体節が文をこえた先行文脈との接続という機能を果たしていることを指摘している。

コボちゃんのお母さんは、26日に歯医者に行くということを忘れないように、壁にかかっているカレンダーの26日の日付を印でかこんでおきました。それをこっそり見ていたコボちゃんは、お母さんのいない間にカレンダーの日付のすべての日を印で囲んでしまいました。(増田 2001 : 53)

拙論(1998)にて連体節内に現れるボイス的な現象について解明を試みた際、連体節の内部構造の特徴を捉える必要性に想到した。しかしながら、上記のようなさまざまな観点からの考察は見られるものの、内部構造をめぐる考察については、本格的な研究がなされていない。

2. 研究の目的

(1)連体節内に現れる構文論的な特徴を分類し、その特徴と「連体節 被修飾名詞」の意味関係との間に関連性があるかどうかを検討する。たとえば、「汗が出るほど辛い料理」「風邪をひいた時、母が作ってくれた料理」の連体節内の構文論的なタイプ 前者は程度を表す副詞節をもち、後者は時を表す副詞節をもち、と、連体節と被修飾名詞との意味的な関係「汗が出るほど辛い料理」「風邪をひいた時、母が作ってくれた料理」(高橋(1979)の枠組みで、前者は「属性づけのかかわり」、後者は「関係づけのかかわり」を表す を分類し、その関係を明らかにする。

(2)連体節内でおこる、連用成分と連体成分の交替という現象を解明する。「お城のような大きい家」「お城ように大きい家」の両名詞句が表す意味内容は同じであり、「ような」と「ように」の交替が可能である。拙論(2013)では、連体節内の連体修飾句「Nのような」(Nは名詞)と連用修飾句「Nのように」が交替可能な場合の条件を論じたが、本研究期間には形式を広げて検討する。たとえば、「霜がつくほどの冷えたグラス」「霜がつくほど冷えたグラス」において、前者は連体修飾形式であり、後者は連用修飾形式をとっているが、両者はともに「冷えた」という性質の程度を表している。ほか、このような交替可能性の条件を詳細に分析する。

(3)第三に、連体節内の述語動詞がとるボイス的な表現形式に着目し、主節の述語の場合と対照させてその用法の特徴を考察する。特に、ボイスの対立の中和(=意味的な違いがなくなること)と、連体節内の成分との関係に注目する。「焼いた魚を買った」「??焼かれた魚を買った」と比較すると、「炭で焼いた魚を買った」「炭で焼かれた魚を買った」では明確なボイス対立の中和がおこっている。このような、中和を引き起こす連体節内の成分にはどのようなものがあるのかを検討し、なぜそうなるのかを考察する。

3. 研究の方法

本研究は帰納的な方法によって行なった。

連体修飾は以下の例に見るように、単語による修飾、句による修飾、節(文のレベルのもの)による修飾等があり、その収集の手掛かりが多様かつ複雑な研究対象用例は、既存のコーパスからの抽出が現実的ではない。

単語によるもの:「おもしろい話」「迷惑な話」「旅の話」「そんな話」

句によるもの:「気になる話」「夢のような話」「何とも言いようのない話」

節によるもの:「太郎が昨日ここで語っていた話」「みんなで旅行に行くという話」

したがって、本研究で用いる用例は、書物から手作業によって抽出した。実例の資料化は、次のから の手順である。

小説・エッセイなどの書物(文庫本書籍)の中から連体修飾部を拾い出す。

1ページの用例数を数え、その数だけそのページをコピーによって複製する。

複製されたそれぞれのページについて、一つの用例だけをマークし、「1枚に1用例」となるように用例をカード化する。

手作業によって連体修飾部の用例を網羅的に収集し、まず形式的単位(単語・句・節)別に分類する。その中から研究の対象となる連体節を選び出し、内部構造のタイプ別に整理し、それぞれの特徴を明らかにするとともに、タイプ間の比較対照によって関係を分析することにした。

4. 研究成果

本研究の第一の目的は、連体節内に現れる構文的な特徴と「連体節 被修飾名詞」の意味的なタイプの間に、関連性があるかどうかを検討することであった。なお研究の対象は、主として動詞述語からなる連体節である。

(1) 予備考察として、寺村秀夫(1975-1978)「内の関係」(被修飾名詞が連体節内の動詞述語と格関係で結びつきうる)のうち、被修飾名詞「人」が主体(ガ格)の意味関係にあり、連体節内の動詞のテンス形式が「スル」の場合について、連体修飾のあり方を考察した。

この場合には、被修飾名詞と動詞の間に少なくとも三つの意味的な関係、すなわち被修飾名詞が動詞との間に「～ガ」「～ハ」「ソノ～ハ」のそれぞれの形で結びつきうる関係がある。

(a) 周平は、どなりかける父の目をにらみ据えた。(寺内貫太郎一家)

父がどなりかけている

(b) 大声でどなりぶつとばす貫太郎は、実は里子という阿弥陀如来の掌で...(寺内貫太郎一家)

貫太郎は大声でどなりぶつとばす

(c) 子供を悪に誘う大人は白を首につけられ海に投げこまれても、その罰は足りない。

その大人は子供を悪に誘う

(真昼の悪魔)

(a)の動詞にはテンスがあり、被修飾名詞(主体)のできごととしての動作を表している。高橋太郎(1979)で「関係づけのかかわり」、高橋雄一(1998)で「偶有性的なかざり」とよぶ用法である。この意味関係では、主体をガの形でいうことがありうる。(b)(c)は高橋太郎(1979)「属性づけのかかわり」、高橋雄一(1998)「習性」にあたる。動詞にテンスがなく、連体動詞句が被修飾名詞の属性を表す用法である。

金水敏(1986)のいう連体節の「限定」「情報付加」の機能は、連体節と被修飾名詞の関係におさまるものでなく、文脈との関係において決まるものであるが、属性を表す場合の、(b)のような被修飾名詞が個別特定である場合には「情報付加」を、(c)のような被修飾名詞が一般化されたものである場合には「限定」を表すことが多い。属性を表す用法にも機能(「情報付加」であるか「限定」であるか)の違いがあり、被修飾名詞が個別特定であるか一般であるかということと関係している。

(2) 「太郎 が/の 飲む酒」「お茶 が/の 入ったグラス」のように連体修飾節内の主体を表す助詞ガとノは交替が可能である。連体動詞句と被修飾名詞の間に格関係が成立している、いわゆる内の関係(寺村秀夫 1975-1978)の連体節において、連体動詞句と被修飾名詞がつくる意味的なタイプ(「関係づけのかかわり」「属性づけのかかわり」(高橋太郎 1979))と、ガとノの使用との関係を分析し、次のような結論を得た。

連体動詞句の動詞にテンスがあり、被修飾名詞と「関係づけのかかわり」にあるときは、動詞句内の主体はノよりもガを用いる傾向にある(「私 が>の 書いた小説」)。連体動詞句の動詞にテンスがなく、被修飾名詞と「属性づけのかかわり」にあるときは、ガよりもノを用いる(「酒 が<の 入ったグラス」)。また、同じ「属性づけのかかわり」であっても、属性の種類(「酒の入ったグラス」(変化の結果の状態)、「つやのある髪」(所有))によって使用頻度が異なり、前者より後者のノの使用率が高い、という結論を得た。「関係づけのかかわり」の「テンスがある」という連体節内の動詞の動詞的な性質と、「属性づけのかかわり」の「テンスがない」という形容詞的な性質の違いが、ガとノの使用傾向の差に現れているのである。

なお、本成果は、『関西外国語大学 研究論集 第112号』(2020年9月)に掲載予定である。

(3) 「お城のような大きい家」「お城のように大きい家」のような、形容詞述語の連体節において見られる連体修飾要素と連用修飾要素の交替が、「氷のような冷えた器」「氷のように冷えた器」

のような、動詞が形容詞的な性質で用いられている、いわゆる「属性づけのかかわり」を表す連体動詞句内において見られる。

また、「属性づけのかかわり」では、「壁にかけた絵」「壁にかかった絵」「壁にかけられた絵」のように、他動詞-自動詞・能動-受動の意味的な対立が中和する（＝なくなる）。

以上のことから、次のようなことが示唆される。被修飾名詞との間にそれぞれ「関係づけのかかわり」と「属性づけのかかわり」をつくる、連体動詞句の動詞の動詞的な性質と形容詞的な性質は、連体動詞句内の修飾成分が連体的な形で示されるか連用的な形で示されるかという問題、そして動詞のボイス的な意味の問題とかかわっている。

[引用文献]

- 大島資生(2010)「接続詞に近い意味合いをもつ連体修飾節」『連体・連用を考える』ひつじ書房
- 金水敏(1986)「連体修飾成文の機能」『松村明教授古稀記念 国語研究論集』明治出版
- 新屋映子(1989)「“文末名詞”について」『国語学 159』国語学会
- 高橋太郎(1979)「連体動詞句と名詞のかかわりについての序説」『言語の研究』むぎ書房
- 高橋太郎(2003)『動詞 九章』ひつじ書房
- 高橋雄一(1998)「連体節における「内の関係」について」『日本研究教育年報(1997年度)』
東京外国語大学
- 寺村秀夫(1975-78)「連体修飾のシンタクスと意味(1)-(4)」『日本語・日本文化』
大阪大学留学生別科
- 増田真理子(2001)「<談話展開型連体節> 「怒った親はこどもをしかった」という言い方」
『日本語教育 109』日本語教育学会
- 光信仁美(1998)「現代日本語の受動文について 典型・非典型と文中における機能との関係に
ついて」立正大学大学院文学研究科 博士論文
- (2013)「「ような」と「ように」の交替 名詞句「N1のようなXなN2」における」
『研究論集』第97号 関西外国語大学

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----